

上表からは、「学んで得た力」と「学ぼうとする力」、
「学ぶ力」の間には、ごく緩やかな相関関係が見られ
た(E層では相関関係が他層に比べ強い)が、「学ん
で得た力」が高い生徒は「学ぼうとする力」、「学ぶ
力」も一般的に高いと断定するほどの優位性は認め
られなかった。

15グループの特性傾向

「学習基礎調査」と「NRT」をクロスさせた15グ
ループは、分析の結果、次の特性傾向が見られた。

A - Hグループ 前述のデータを40人学級に置
き換えた場合の学級中の各グループの生徒割合:0.8人)

「授業での発表・発言」をよく行い「自力での解決
方法」を身に付けているが、「校外での学習時間」が
短く、「学習計画の立案」も不十分である。

A - Nグループ (同上:1.9人)

「校外での学習時間」は多寡に偏らず適度であり
「質問による解決方法」「参考書等の活用」等も身に付
いているが、「将来の夢」を持っていない。

A - Lグループ (同上:0.2人)

「ストレス度」が高く「ストレス防止」の手段も持て
ていないため、「生活の充足感」が低い。

B - Hグループ (同上:2.9人)

「学習の楽しさ」は感じているが、「睡眠時間」「授
業への準備」等の基本的な生活・学習習慣が定着し
ておらず、また「自己表現」の力等が不足している。

B - Nグループ (同上:8.2人)

「苦手への挑戦」の意欲や「復習」の学習姿勢は身に
付いているが、「校外での学習時間」「他者からの肯定
感」等の少なさが目立つ。

B - Lグループ (同上:0.7人)

L群内では相対的には「励ましを受ける度合」が高
く「ストレス度」も低い、「自己理解度」「教科書・
ノートの活用」等が不十分である。

C - Hグループ (同上:2.5人)

「校外での学習時間」は適度であり「参考書等の活
用」にも努めているが、「励まし等を受ける度合い」
「長期休業中の体験的学習」等が少ない。

C - Nグループ (同上:7.6人)

「参考書等の活用」は見られるが、「校外での学習
時間」は短く逆に「テレビの視聴時間」は長く、また

「苦手への挑戦」等の姿勢が不足している。

C - Lグループ (同上:0.9人)

L群内では相対的には「他者からの肯定感」「授業
の楽しさ」を感じており、「授業での集中」「教科書・
ノートの活用」にも比較的努めている。

D - Hグループ (同上:2.0人)

「学習計画の立案」を実行しており、「励ましを受
ける度合い」も高いが、「テレビの視聴時間」「授業で
の発言・発表」「読書」等で努力の余地がある。

D - Nグループ (同上:5.5人)

「家庭での心身のくつろぎ具合」は高いが、「テレ
ビの視聴時間」の長さが目立ち、「苦手への挑戦」「質
問する解決方法」等の姿勢が不足している。

D - Lグループ (同上:1.5人)

「家族との会話」が多く「家庭での心身のくつろぎ
具合」も高いが、「授業の楽しさ」等は感じておらず、
学校場面での「ストレス度」が高い。

E - Hグループ (同上:0.6人)

「ストレス度」は低い、「テレビの視聴時間」の短
縮や「授業での発言・発表」「自力での解決方法」「参
考書等の活用」姿勢等で努力の余地がある。

E - Nグループ (同上:3.0人)

「将来の夢」を持っているが、「他者からの肯定感」
「家族との進路の話し合い」が少なく、「校外での学
習時間」「復習」等も不足している。

E - Lグループ (同上:1.7人)

「将来の夢」は持っているが、「家族との会話」は少
なく「家庭での心身のくつろぎ具合」も低い。また、
学校では「授業での集中」「授業の楽しさ」を持ってお
らず「叱責等を受ける度合い」が高い。

「学ぼうとする力」、「学ぶ力」と「学んで得た力」と
は相乗的に作用し、『学力』として高まっていくこと
が期待される。しかし、個人における相互の力の組
み合わせは多様であり、単に諸テストの平均点(「学
んで得た力」)のみを基準にした学習指導では、個に
応じた『学力』の向上を期待することは難しい。

本調査で行った15グループの特性傾向の分析から
得られたデータが、多少でも「個に応じた学習指導」
の参考となれば幸いである。